ちょっとそこまで
～お散歩日和（名言編）～

鞭や虐待はアヘンのようなものだ。
感覚が麻痺してくるにつれ、量を倍にしなくてはならない。
……　ハリエット・ビーチャー・ストウ

ご存知「アンクル・トムの小屋」の一節です。私は長く作者の名前を「ストウ夫人」として覚えていましたが、最近は「ストウ」のみの表記になっています。落ち着いて考えれば当たり前の話です。同じ理由で「キュリー夫人」も変です。「マリー・キュリー」と言うべきでしょう。

「アンクル・トムの小屋」は、数年前に見た映画「それでも夜は明ける」と同じようなストーリーと言えますが、後者はハッピー・エンドなのに対し、前者は救いが全くありません。次々と悲劇が襲い、最後は非業の最期を遂げることになります。と言うと語弊があるかもしれません。トムは最期に神々しい表情で自分が勝利したことや、愛の大切さを説きながら、昔の若主人の胸に抱かれて天国に凱旋したのですから。しかし、ジョージの到着がもう少し早ければと思うと少し悲し過ぎます。

人身売買の対象となり、掟を破った奴隷に加えられる鞭打ちの刑、そして、虐待が日常茶飯事というイメージが先行しますが、それを作ったのが「アンクル・トムの小屋」だとも言われています。

ただ、この物語が南北戦争を引き起こしたのは事実でしょう。この本が出版されるとたちまち米国全土に奴隷制度を巡って賛否両論が渦巻き、南北戦争にまで発展したからです。リンカーンが初めてハリエット・ストウに会った時、

「あなたがこの大きな戦争を起こした小さな婦人ですね。」

と言ったエピソードは特に有名な話です。右の写真はボストンに立つ銅像です。

以前、「あなたは奴隷ですか？」という、センセーショナルなタイトルの、ひろゆき氏に対するインタビュー記事がネットに掲載されていました。その内容はここでは差し控えますが、とうの昔に消えてしまったと思っていた「奴隷」という言葉を意識の上で蘇らせていたのには驚かされました。

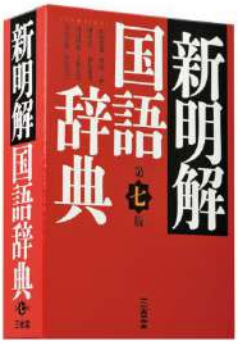
ところで、奴隷からの連想ですが、黒澤清監督の作品に「散歩する侵略者」があります。この話は、地球侵略を企てる宇宙人たちが地球人の頭から概念というものをせっせと集めていき、最後に「愛」という概念を奪ってしまうという内容です。ところが、そのために宇宙人は地球の侵略をやめてしまうというオチで終わります。ここで、小泉今日子演じる女医が呟きます。

「このタイミングに意味がある。人類は山のように問題を抱えていたでしょう。それをもう一度いちから考え直すことができたんだから。」

こうして少しだけ希望を語らせていますが、私はそれよりも、愛という概念を奪われた主人公の１人長澤まさみが廃人になって生きていくことの方がテーマにふさわしいと思いました。それほど私たちにとって「愛」という概念は生きていくた

めには必要不可欠なものだと訴えていることになります。

しかし、私たちはとかく安易に「愛」という言葉を口にしますが、その意味を本当に理解している人は誰もいないのではないでしょうか。この映画の中でも皮肉っぽく教会の牧師から愛を語らせようとするシーンが出てきます。ところが、抽象的で曖昧で要領を得ない意味不明な聖書の文言を並べただけで説明しようとして、却って滑稽さが増していくばかりでした。ここは、信者に対して結構危険で冒涜に近い表現をしているなと思いつつ見ていました。いずれにしても、私はそういう明確に説明できないものに、誰もがすがって生きようとしているのが何とも愉快でした。こういう割り切れないことが多々あるからこそ世の中は面白いのですが、正直言ってもやもやする感情が残るのも事実です。



ちなみに、新明解国語辞典第七版で「愛」を引きますと、

「個人の立場や利害にとらわれず、広く身のまわりのものすべての存在価値を認め、最大限に尊重して行きたいと願う、人間本来の暖かな心情。」

と出ていました。ところが、これが「恋愛」となると、がらりと表現が変わります。

「特定の異性に対して他の全てを犠牲にしても悔い無いと思い込むような愛情をいだき、常に相手のことを思っては、二人だけでいたい、二人だけの世界を分かち合いたいと願い、それがかなえられたと言っては喜び、ちょっとでも疑念が生じれば不安になるといった状態に身を置くこと」

となります。ついでに触れると、第四版では、

「特定の異性に特別の愛情をいだいて、二人だけで一緒に居たい、出来るなら合体したいという気持を持ちながら、それが、常にはかなえられないで、ひどく心を苦しめる・（まれにかなえられて歓喜する）状態」

でした。どちらが的確な表現かは好みの分かれるところですが、これと比較すると、「愛」はあまりにも無難過ぎてつまらないという印象を持ってしまうのも当然でしょう。

さて、このコラムを書いている時に、バート・バカラックの訃報が届きました。１９６０年代から７０年代にかけての深夜放送全盛時代、彼の楽曲がかからない日はなかったと言えるでしょう。その作品の中から、「世界は愛を求めている」を紹介します。歌ったのはジャッキー・デシャノンです。映画「フォレスト・ガンプ」では、ベトナム戦争の病院シーンで流れました。と言っても全然軽い扱いでしたが…。もともと、バカラックはD・ワーウィックのために書いたのだとか。確かに、ワーウィック版の方が情感豊かで合っているように思います。

その「フォレスト・ガンプ」の中で、愛に関して一番心に沁みるのは、次のセリフでしょう。

「初めてのクリスマスに何をもらったか覚えてない。初めてのピクニックでどこに行ったかも覚えてない。でも、世界中で一番美しい声を聞いた時のことは覚えてる。」

ジェニーとの出会いを回想するシーンで語る、フォレストの言葉です。以来、彼は一途に彼女を思い続けることになります。その思いはいずれ彼女にも通じるのですが、その時はもう既に不治の病に侵され、永遠に帰らぬ人となってしまいます。愛を語るには悲劇がふさわしいということなのかもしれません。

個人的には、キング牧師の演説映像とともにＢＧＭで流れるバージョンが好きで、いつの間にか、この種の映像には「イマジン」が定番になってしまいましたが、「世界は愛を求めている」のメロディの方になぜか琴線を揺さぶられます。多分、愛という言葉の響きの裏側にある哀しみのような切なさをメロディから感

じ取るからだと思います。チャプリンの名言「私は悲劇を愛する。悲劇の底にはなにかしら美しいものがあるからこそ、愛するのだ。」と共通する感性ではないかと一人合点しています。

What the world needs now is love, sweet love
It's the only thing that there's just too little of
What the world needs now is love, sweet love
No, not just for some but for everyone

世界にいま必要なものは愛、 甘く優しい愛
あまりに少なくて　たったひとつのもの
いま世界が求めているのは愛、甘く優しい愛
ただ誰かのためだけじゃなく　みんなのために

ものはついでということで、最後に、新明解に負けず劣らぬ「愛の名言」の数々をお届けしてこのコラムを終えることとします。

・私が理解していることの全てを私はそれを愛するが故に理解している。愛は生命そのもの。（トルストイ）

・最高の愛とは魂を目覚めさせるようなもの。それは、私たちの心に火を灯し心に平穏を与えてもくれるもの。それは、私があなたにどんな時も与え続けたいと願う、たった１つのもの。（ニコラス・スパークス）

・愛情には１つの法則しかない。それは愛する人を幸福にすることだ。（スタンダール）

・人間には「愛」がありさえすれば、幸福なんてなくたって生きていけるものだ。（ドストエフスキー）

・この世界で最も美しいものは、じつは見えたり聞こえたりするものじゃなく、心で感じるものなんじゃないでしょうか？（ヘレン・ケラー）

・完璧だからその人を愛するんじゃない。完璧ではないにも関わらず愛するんだ。（ジョディ・ピコー）

・愛はお互いに見つめ合うことではなく、共に同じ方向を見つめることである。（サン・テグジュペリ）

・一緒に泣いた時に初めてお互いがどんなに愛し合っているのかが分かるものだ。（エミール・デシャン）

・愛とは相手に変わることを要求せず、相手をありのままに受け入れることだ。（ディエゴ・ファブリ）

・愛とは巨大な矛盾であります。それなくては生きておれず、しかも、それによって傷つく。（亀井勝一郎）

・天には星が、大地には花がなければならない。そして、人間には愛がなければならない。（ゲーテ）

・二人の人間が愛し合えば、ハッピーエンドはあり得ない。（ヘミングウェイ）

・世界平和のためにできることですか？家に帰って家族を愛してあげてください。（マザー・テレサ）

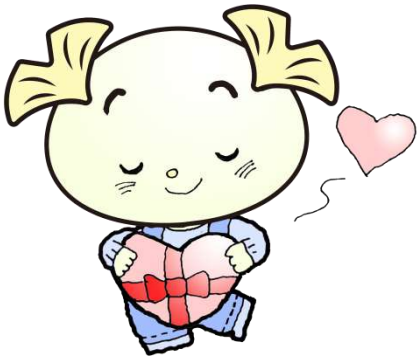
・人生で最も幸せを感じる瞬間というのは、他人から「愛されている」もしくは、「自分自身を愛すること」を実感できるとき。もしくは、自分と同じように誰かを愛するとき。（ヴィクトル・ユーゴー）

・恋愛はただ性欲の詩的表現を受けたものである。少なくても詩的表現を受けない性欲は恋愛と呼ぶに値しない。（芥川龍之介）

・愛だけが、敵を友人に変えられる唯一の力だ。（キング牧師）

・本当に人生を愛しているなら時間を無駄にするな。人生は時間でできているのだから。（ブルース・リー）

・愛してさえいれば、それは無限を意味する。（W・ブレイク）



（終）